古代ギリシア神域の配置計画の発展に関する試論

THE DEVELOPMENT OF SITE PLANNING OF ANCIENT GREEK SANCTUARIES

伊藤 重剛*

Juko ITO

There have been discussions about the ancient Greek sanctuaries before the Hellenistic period that they had no principle of site planning. Especially those like Olympia, Delphi, etc., which had long tradition in the mainland Greece, in fact look like a jumble, mainly because the buildings were laid neither orthogonally nor parallelly each other, compared with Hellenistic regular planning. However, the present analyses of the plans would suggest us that the buildings in some of the sanctuaries were related each other through axes and the extended lines of the exterior walls. The building arrangement of this kind would have been predecessors of the Hellenistic symmetrical and axial planning of the sanctuaries.

Keywords: *ancient Greece, sanctuary, site planning, Olympia, Cos*
古代ギリシア, 神域, 配置計画, オリンピア, コス

1. はじめに

古代ギリシア・ローマの神域において、建物の配置の手法は必ずしも一様ではない。しかしながら、アルカイック期からローマ期までの長い期間には、その配置方法にひとつの発展の傾向といったものが観察される。それはアルカイック・クラシック期の必ずしもひとつの定まった方法のないような、いわば地形に合わせた自由な配置から、ヘレニズム・ローマ期の明らかにひとつの一貫したマスタープランによって軸線性、左右対称性、正面性をもつ建築の複合体としての配置への発展であった。そして紀元後2世紀頃の中近東一帯を中心に分布するパルメック、ジェラシュなどにある巨大神域が、この発展の最終的な形であった。

こうした軸線計画にもとづいた整然たる配置計画は、ヨーロッパの建築史を考える上で、重要な意味をもっている。というのは、例えばルネッサンス時代のヴィスタを意識したヴィラの計画、ヴェルサイユに代表されるバロックの宮殿と庭園の計画、透視図的效果を生み出す都市景観の作り方など、ルネッサンス以後の西洋建築にも大きい影響を与えているからである。つまりルネッサンス以後近代建築が始まる以前の西洋では、建物の配置における秩序の感覚とは軸線に基づいた計画であったといっても過言ではなく、そのそもその起源はヘレニズ

ム建築にあり、それがローマ建築を介してルネッサンスに伝えられたのである。

これらヘレニズム・ローマ期の神域は、明らかに最初から一つの複合建築として作られており、配置計画の意図を明らかにすることが比較的容易で、筆者も旧稿でいくつかの分析を試みた¹⁾。しかしながらアルカイック・クラシック期から続くギリシアの伝統的な神域、とくにアテネのアクロポリス、デルフィ、オリンピア、デロスなど古代ギリシアを代表するようなギリシア本土の神域については、明確な配置の方法はいまだ解明されていない。これらの神域の配置計画については従来の研究がいくつかあり、旧稿で報告しているので²⁾、再度ここで詳しく述べないが、スティルウェルのいうように、「神殿は遠くから見えるように丘のような高みになった場所に配置され、神域の入り口からは非軸線的に斜めに見られるような角度で配置され、正面を東に向けられている」、という言葉に代表されるであろう³⁾。また『ギリシア都市はいかにして作られたか』を書いたウィッチャーリは、「ギリシア建築は、個々の建築としては調和のとれた比例をもつ非常に優れた傑作であるが、それらを群として見た場合、ごたごたした乱雑な配置となっている」としている⁴⁾。

こうした研究から、ヘレニズム以後の整然とした配置

本論文の一部は日本建築学会九州支部研究報告 第31号、1989年3月、日本建築学会大会学術講演梗概集(中国)、1990年10月に発表した。

* 熊本大学工学部建築学科 講師・工博

Lecturer, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Kumamoto Univ., Dr. Eng.

計画は、純粋にギリシア的なものであると考えられているギリシア本土のアルカイック・クラシック期のそれとは、一見するところ無関係であるかのように思われる。これらの神域においては、ヘレニズム期になってさへも、明快なヘレニズム・ローマ期の神域の計画の特徴を示さないのである。その理由としてあげられるのは、これらの神域がミケナイ時代や幾何学時代から数百年もかかるような長い期間にわたって、建設が断続的に行なわれたため、全体をひとつの統一された原理によって、建築の複合体を形成していくということが困難であったということや、長く伝わってきた各神殿や神祠の向きや位置などが、時代が下がって建築的な発展をとげた後にもそのまま保持されたため、ということなどが考えられる。

とはいっても、ヘレニズム期に出現した軸線的な平面計画とその考え方が、アルカイック・クラシック期の配置計画と全く無縁で、突然出現したとも考えられない。本稿ではまずアルカイック期からローマ期までの遺構が残るオリンピアの神域と、クラシック期からヘレニズム期にかけての遺構をもつコスのアスクレピオス神域についてその配置計画を分析する。さらにそのほかの神域についても、ヘレニズム以降とくに紀元前2世紀を境として、建物の配置が完全に軸線的、左右対称的な配置に変貌していくまでの経過を、とくにプロピロン、祭壇及び神殿の位置関係に注目して検討をこころみる。というのは、この三種類の建築は神域の中でもっとも基本的な建物で、参詣者の動線や視線に対して大きい影響を与える、神域内での建物の配置の上で非常に重要なものであるからである。

2. オリンピアの配置計画（図—1）

オリンピアはミケナイ時代のメガロンが発掘されているように年代的にも非常に古い時期まで遡り、全ギリシア的な行事であったオリンピック競技が行なわれた極めて重要な神域であり、ギリシアを代表する神域といつてよい。ミケナイ時代以後も建設活動はアルカイック期からローマ期まで途切れることなく続けられている。神域はゼウス神殿やヘラ神殿を中心として、スタディオ、パラエストラ、宿泊施設、ストア、宝庫など一連の建物から構成され、アルティスと総称されている。ペロポネソス半島西側のクラデオス川に面した平坦な場所なので地形からくる建物配置の困難さはとくに考えられない。

全体的な配置をみると、神域内の建物は、ペロピオンの門など一部を除いて、神域の中央に東西に向けて配置されたゼウス神殿を基準に、これと概ね平行かあるいは直角方向に並ぶことを基本的に意図されていたと考えられる。にもかかわらず一見して分かるとおり、互いに厳密に平行ないし直角に配置されている建物がほとんどないので、建物の配置は不規則と見られ、これまで配置に

関してとくに明確な原則がないとされてきたのは、前述したウィッチャーリの言のとおりである。しかし、平面において建物と建物の位置関係に着目して子細に検討すると、近接して建てられた二つの建物の間には、以下に述べるような建物間の関係が見出された。

分析に使用した資料として、現在までに公開された実測図の中では最も精度の高い、クルティウスによる遺跡現況実測図（A2版6枚組、縮尺1/320）を用いた⁵⁾。また建築年代の参考とするためマルウィッツによる遺跡概説書の配置図および年表を参照した⁶⁾。以下の所見のうち建物どうしがなす角度については、クルティウスの実測図を複写しこれを貼り合わせた図上で補助線を引き、30分毎の目盛りのついた分度器を用いて著者が計測した。建物の軸線や壁面の延長線などの見通し線が他の建物の隅角部に当たるという点については、同様に図上で考えられる幾種類もの補助線を引いて検討し、さらに現場で目測による確認を行なった。クルティウスの実測図あるいは本文の記述中には、遺構の出土状況が客観的に図面化されあるいは記述されているだけで、こうした角度の記述や分析等は一切なされていない。

1). 建物の外縁部の延長線と他の建物の出隅の一致

この例で最古のものは、ゼウス神殿（紀元前457年）とエコーホール（紀元前4世紀後期）の関係に見られる。ゼウス神殿の東西軸とエコーホールの南北軸は互いに93度の角度をなしており、完全に直角ではない。しかしゼウス神殿の南側の基壇の線を東に延長すると、エコーホールの基壇南端に当たる。つまりエコーホールは、ゼウス神殿の南側基壇の延長線上に、その基壇の南端を合わせて配置されている。

これと同じ関係は、エコーホールの建設とほぼ相前後して建てられた、オリムピック関係者達の宿泊施設であるレオニダイオン（紀元前4世紀後期）と、パラエストラ（紀元前3世紀）との間にも見られる。これら2つの建物もそれらの南北軸が互いに12度の角度をなし、完全に平行に配置されてはいない。これらは本来の神域の領域からするとその周壁の外側に位置しているものであるが、建物の規模が大きく、神域全体の配置の上で非常に重要性をもっていたことが推測できる。

上の2例とは逆に既存の建物の出隅に新築の建物の外縁の延長線を揃えた例が見られる。レオニダイオンの北側基壇を延長すると、ゼウス神殿の基壇2段目の南東隅に当たる。厳密には基壇最上段あるいは最下段でなく基壇の2段目に合っているが、これはおそらく計測時ないし施工時の誤差（神殿からの距離約115mの距離に対して0.6m）と思われる。レオニダイオン建設時には、周辺にある最も大きい建物がゼウス神殿であったので、その方位は神殿を基準に決定された可能性が高い。

もうひとつこれと同様な関係が認められるのは、レオ

図-1 オリンピアのアルティス

ニダイオンと南ストア（紀元前2世紀）である。この二つの建物についても、レオニダイオンの南北軸と南ストアの東西軸は互いに直角ではなく95度の角度をなしているが、南ストアの北側の壁の延長線はレオニダイオンの基壇南東隅に当たる。つまり前2世紀に南ストアが建てられるとき、そのすぐ北隣にあるプウレウテリオンと平行に配置しながら、その位置はレオニダイオンと空間的な繋がりを保つように配置されたものと考えられる。

以上の例をまとめてみると、紀元前5世紀に神域内で建築的にもっとも重要な建物であるゼウス神殿が建てられると、その後紀元前4世紀にはこの神殿を基準にエコーホールとレオニダイオンが配置されていることが分かる。また紀元前3世紀以後はレオニダイオンを基準にパラエストラおよび南ストアが建てられていることが分かる。

2) 建物の軸線と他の建物の出隅の一致

紀元前4世紀になるとすぐ、メトロオンおよび南東ストアが建設された。同時に南北に平行に並ぶ2棟のプウレウテリオンが、正面に列柱廊を付加されて一つの複合体となった。興味深いことに、この新しくされた複合体としてのプウレウテリオンの軸線は、南東ストアの南東の隅に当たる。また同時にメトロオンの北西の隅はヘラ神殿の軸線上に位置している。つまりこれら4棟の建物は、それぞれ一方の建物の軸線上にもう一つの建物の出

隅がのるように、配置されているのである。

オリンピアの建物配置に認められるこれらの現象は、建築家などによって意図されたものではなく、全くの偶然が重なった結果のようにも見える。しかし単純に確率の問題として見ても、こうしたある建物の軸線上あるいは特定の線の延長上に、別の建物の隅角部が偶然のたたり、あるいはその逆の現象が起こる可能性は非常に少ない。軸線あるいは壁の延長線といっても実際には幅のある線であったり、敷地条件や建物の形も考慮されなければならないので、もちろん理論そのままには行かないが、とにかくこの確率は非常に低いものと考えられる。したがって、これらの配置は一見不規則に見えながらも、こうした意図によって計画されていたものと推測されるのである。

上で見たようにこのような手法はオリンピアでは紀元前4世紀以後に顕著に見られるが、コスやペルガモンなど他のヘレニズム期の神域にも散見されるので、今後それらと比較検討する必要がある。紀元前2世紀頃になると、マグネシアのアルテミス神域など完全に左右対称の軸線計画が出現するが、オリンピアに見られる軸線や外縁線を意識した建物の配置は、それへ発展する前段階であると考えられる。

3. コスのアスクレピオス神域の配置計画 (図-2)

コス島のアスクレピオス神域の発掘と研究は、19世紀から20世紀初頭にかけて行なわれ、報告書がヘルツォークによって1932年に出版されている。本稿の分析に用いた図面は、報告書の中の二枚の配置図(縮尺約1/1100及び約1/750)である⁷⁾。その後の調査はなされておらず、これ以上に大きい縮尺ないし精度の図面は、現在のところ発表されていない。したがってオリンピアの図と比較すると、分析の精度は悪いが、同じ方法で建物の軸線や壁面の延長線などの補助線を図上に引き分析を行なった。現場は階段で明らかなように斜面であり、しかも遺構はいずれも基壇までくらいしか残っていないので、以下の所見が全て確認できたわけではないが、上テラスの擁壁東端と下ストアの東翼廊の関係などは現場で確認できた。

神域はコス島の緩斜面を利用して、三段のテラスを形成するように配置されている。最初は祭壇が中テラスに紀元前4世紀中頃に建てられ、その後紀元前3世紀になり上テラスと下テラスにそれぞれコの字型のストアが向かい合って建てられた。この段階で中テラスには祭壇の前に神殿Bと神官の住宅が建てられた。紀元前2世紀になると、上テラスの中央にドリス式の神殿が建てられ、

木造だった上ストアも石造のものに建て替えられ、最終的にほぼ現在遺跡に見られるような神域として形成された。

最終的な紀元前2世紀の平面図をみると、神殿を上テラスの中央に置き、正面性、左右対称性、軸線性の強いヘレニズム的な配置計画であることが分かる。しかしながら、オリンピアでの建物配置と同様に、各テラスの上の建物はお互いに少しずつ角度をなしており、完全に平行ないし直角に配置されているわけではない。例えば上ストアと下ストアの南北中心軸線は、約5度の角度がつけられており、しかもそれらは東西に互いにずれ合っている。その明確な理由は分からないが、おそらく前身建物の位置と方向ないし敷地の形状などの条件から生じたものと思われる。また中テラスの古い神殿などの建物群の配置を見ると、アルカイックからクラシック期にかけてよく見られるような不規則な配置となっている。

しかしながら、オリンピアと同様平面図をよく検討すると、担当した建築家は上ストアと下ストアをどうにかして関係づけようと努力していることが認められる。それは、上ストア西翼廊の列柱の延長線は下ストア西翼廊の南西の出隅に当たるし、また下ストア東翼廊の延長線は上テラスの擁壁の東端に当たっていることから分か

る。また、下ストアの東翼廊と主廊のなす角度は、正確には直角を成さず内側に少し曲げられており、しかも下ストアの主廊の内法長さは、東翼廊と主廊の交差する入隅部から東翼廊列柱の延長線が上テラスの擁壁に当たる点までの距離と等しいのである。東翼廊の東側には、東翼廊と主廊の角度を直角にするのを阻むような敷地の条件は特に認められないので、下ストアの位置と形状は、上テラスとの位置関係を強く意識されているとしか考えられない。下ストアの西翼廊の西側は、傾斜の急な斜面になっており、この敷地条件のために下ストアは少し東側にずらされ、しかもその軸線は上テラスの軸線と少し角度をなすように配置されたものと推測される。つまりこの神域の設計者の意図は、敷地条件さえ整えば完全に上下のテラスを平行に向かい合わせ、中心に軸線が通りその軸線上に神殿を配置することであつたと思われる。

また神域への入り方としては、外側から下ストア中央に取り付けられた大階段を上り、入り口ホールを抜けて柱廊に出て、そこから下テラスの中庭に出ようになっている。下テラスの入り口の軸線は、当然ながら上テラスの神殿Aの軸線とは一致せず、中庭に入った見学者は神殿Aをやや斜めに見ることになり、この視角はプロピロンから神殿の正面と側面を同時に見るギリシアの伝統

図-2 コスのアスクレピオス神域

的な神域の配置計画に似ているとも言える。しかし、神殿Aのファサードがほぼ正面に左右対称に見えるわけで、ヘレニズム的な配置とも言える。

ともあれ、コスのアスクレピオス神域の配置をみると、アルカイック・クラシック期の神域と典型的なヘレニズム期の神域の中間の形を示しており、この配置が行なわれた紀元前3世紀という配置計画における過渡期の時代をよく表している。紀元前2世紀になると、マグネシアのアルテミス神域に見られるような、完全に左右対称の神域の配置となるのである。

4. ギリシアの神域における建物配置のパターン

以上オリンピアとコスの例で見たように、建物配置の原則が明確に見えないような神域でも、建物の外壁の延長線や軸線を通して、建物どうしが関係し合っていることが認められる場合がある。もとよりアルカイック期からヘレニズム後期の完全な左右対称形への神域の配置の発展は必ずしも一様ではない。しかしながら、建物配置が必ずしも明確でないアルカイック・クラシック期の神域について、このような観点から建物の配置をもう一度再検討する必要がある。神域において建築的に重要な建物としては、神殿を第一として、プロピロンおよび祭壇がこれに次ぎ、さらに後になるとこれらにストアが付加された。ここでは建物に関する記述と平面図の得られるギリシアの神域を全て検討し、これらプロピロンと神殿及び祭壇の位置関係について、それぞれの建物の軸線をもとに分析した。そしてこの分析を通じて、明らかにお互いの位置を相互に規定し、あるいは規定されていると思われる関係に着目して選び出し、互いにどういう関わり方をしているか、その関わり方を以下の三つに分類することを試みた。

資料としては、それぞれの神域について公開されたオリジナルの発掘報告書あるいはその複写を用い、分析方法としてはオリンピア、コスの例と同様に行なった。図面の精度ないし縮尺はまちまちで必ずしも一定ではないが、建物どうしの位置関係を定性的に論じる本稿の目的には叶うものとした。

1) プロピロンの軸線と神殿ないし祭壇の軸線の屈折 (図-3)

セリヌス デメテールの祭壇 前5世紀

ペルガモン ゼウスの大祭壇 前2世紀

マグネシア アルテミス神殿及び祭壇 前2世紀

これらの神域では互いの建物の軸線が一本の直線として重ならず、どちらかの建物のファサードの面で軸線が折れ曲がっている例である。

シシリーのセリヌスにあるデメテール神域はその市域から少し外れたところにあり、アクロポリスの外側の緩

い丘陵が平地に移る境目に位置している(図-7)⁸⁾。全体の形はほぼ矩形であるが、一部不整形の部分がある。主建物である神殿は紀元前6世紀のもので、その前にある長い祭壇もほぼ同時期だと思われる。そしてこの神殿と祭壇は、ほぼ矩形の神域に対して、約15度の角度をなしている。プロピロンは神域の東壁と直交するような配置で、紀元前5世紀に作られたものである。したがって現在遺跡に見られる建物の配置は、紀元前5世紀に形成されたものと思われる。プロピロンの軸線は真直ぐ正面の祭壇の中央を通るが、祭壇自体はこの軸線とは角度を成している。しかしながら神殿自体との関係は、プロピロンの軸線が神殿の正面左隅に当たるという関係になっている。このように、この神域は全体を貫くただ一本の軸線を中心に全ての建物が配置されているわけではないが、プロピロンの軸線は祭壇の中央に向かうように意識的に配置されている。

ペルガモンのゼウスの大祭壇⁹⁾は、ペルガモンの全盛期であるエウメネスⅡ世(BC.197-159)の時代に建設されている。神域全体の形はほぼ矩形であるが、上のアゴラからアクロポリスに登る斜めの道に面しているため、入口側の神域の壁は結果的に全体の軸線に対して斜めについている。プロピロンの位置と大きさは、岩盤の上に痕跡が残っているので確認できるが、具体的にどんな建物であったかは不明である。しかしながら、大祭壇の軸線は明らかにプロピロンの正面中央を通っており、大祭壇とプロピロンは互いに斜めに配置されているけれども、プロピロンを通してこの神域に一歩足を踏み入れた人は、その身体をほんのわずかに左に向けるだけで、大祭壇の裏正面に向き合うことになる。

同様のことはマグネシアのアルテミス神域についても言える¹⁰⁾。ヘルモゲネスによって設計されたと言われているこの神域は、紀元前2世紀に入って建設が始められ、完成したのは紀元前130年頃とされている。ここではプロピロンが、隣接するアゴラを囲むストアに組み込まれた形になっており、このストアが神域に対して斜めに配置されているため、プロピロンは神域全体の軸線に対して斜めに配置された形になっている。しかしながら神域全体の軸線はプロピロンの中央を通っており、プロピロンを通り抜けた人は、ペルガモンと同様に真正面に大祭壇そしてその背後にアルテミスの神殿を望むことになる。

これらの神域では、神域の全体の形が若干いびつで、一本の軸線が神域の中央を貫通しているわけでもなく、建物がこの周囲に完全に左右対称に配置されているわけでもない。しかしながら計画者の頭の中には、理念として完全な軸線計画が存在していたに違いないと思われる。このように斜めに配置することになった理由は、おそらく敷地の条件とすでに建っている建物の位置を変え

図—3 プロピロンの軸線と建物の軸線が屈折する例

図—4 プロピロンの軸線が建物の隅角部に当たる例

得ないという歴史的な条件によるもの、と解釈される。

2) プロピロンの軸線と建物の出隅部の一致 (図—4)

セリヌス デメテル神殿 前5世紀

ベルガモン アテナ・ポリ阿斯神殿 前3世紀

前述したように、セリヌスのデメテル神域ではプロピロンの軸線が祭壇の中央を通っているが、その後ろの神殿の正面左側の隅もこの軸線上に置かれている。プロピロンを新しくここに建設するとき、神殿と祭壇のどちらを配置の基準として選んだかは不明であるが、いずれにせよ、プロピロンの軸線は神殿と祭壇の双方とこうした関係をもっている¹¹⁾。ベルガモンのアテナ・ポリ阿斯神域はアクロポリスの上にあるが、神殿は紀元前3世紀に建てられ、周囲を取り囲むストア及びプロピロンがエウメネスⅡ世(前197-159年)の治世のときに建てられた¹²⁾。プロピロンの軸線はここでもまっすぐ神域内を横切り、アテナ・ポリ阿斯神殿の基壇の南西隅に到っている。もっともこの神域の場合、プロピロンから見える神殿の姿はその正面ではなくその側面であり、正面性には欠ける。神殿の正面に向かう位置にプロピロンを配置できなかったのは、そこにすでに図書館があったこと、そしてそこまで道路が達していなかったという敷地の条件がその理由と思われる。

3) プロピロンの軸線と建物の外壁線の一致 (図—5)

プリエネ ゼウス神殿 前3世紀

ベルガモン デメテル神殿 前3世紀

プリエネ アテナ・ポリアスの祭壇 前1世紀

プリエネのゼウス神域は、市の中心に位置するアゴラの東側にある¹³⁾。町全体はいわゆるヒッポダモス式の格子状の道路網で計画されているので、神域自体の形も矩形である。神殿およびストアの年代は紀元前3世紀とさ

図—5 プロピロンの軸線と建物の外壁線が重なる例

れる。神域は東側に入り口があり、北、南側にストアを配し、前柱式のゼウスの神殿は、その背面を神域の西側の壁にはば接するようにして中心からやや北側に寄せて建てられている。したがって、神域全体の軸線性は損なわれている。この神域ではプロピロンとなる建物はなく、単に壁が入り口として開いているだけである。しかしながら入り口の軸線は神殿の北側の外壁の線と一致しており、整然とした全体の計画から見てもその位置は明らかに意図的なものと思われる。

同じくプリエネのアテナ・ポリアスの神域でも、その

プロピロンと祭壇について同様の現象が認められる¹⁴⁾。神殿は紀元前4世紀、祭壇は前2世紀そしてプロピロンはアウグストゥスの時代のものである。ここではプロピロンを入ると、その軸線上に祭壇の南側の端があり、神殿はその背後に斜めに望まれる。ヘレニズム期にこの同じ位置にプロピロンの建物ないし入り口があったかどうか不明であるが、プリエネのゼウスの神域の例からしてその可能性は十分考えられる。

ペルガモンのデメテール神域は、これらの神域と較べると規模が小さく、また神殿の幅と祭壇の幅が等しいという違いこそあるが、プロピロンと祭壇あるいは神殿の位置関係の点では同じである¹⁵⁾。神域の年代は紀元前3世紀であるが、神殿の正面部分だけローマ期に変更が加えられている。ここでもプロピロンの軸線は、奥に細長い神域のほぼ中央に位置する祭壇の左端を通り、さらにその背後の同じ幅の神殿の左端の壁に達している。コリントの北の市壁近くにある紀元前4世紀に建てられたアスクレピオス神域は神域全体が矩形で、プロピロン、神殿及び祭壇がそれぞれ平行な軸線をもっている点でこれらと非常に類似している¹⁶⁾。しかしこの神域が上記の3例と違う点は、プロピロンの軸線と神殿あるいは祭壇のどの部分も重ならないということである。

5. 神域の軸線計画の他の建築物への影響

これまで見た神域における、軸線を意識した配置計画の影響は確実に他の世俗建物にも及んでいる。例えばミレトスのギムナジウム（前2世紀）、同じくミレトスのブウレウテリオン（前175-164年頃）は中央を貫く一本の軸線を中心に、中庭の周囲に列柱を廻し、正面中央に前方に飛び出したプロピロンをもった完全な左右対称の平面をもっている（図-8）。またオニアンスが指摘するように、アルカイック期から徐々に発展した不規則な配置をもったアテネのアゴラでさえも、アッタロスのストア（紀元前159-138年）の配置はヘファイストスの神殿の軸線を基準にした配置を行なっている（図-6）¹⁷⁾。しかもこれらは全て紀元前2世紀に集中しており、この時期が建築の配置計画に、完全に左右対称の軸線計画という明確な方針が打ち出され、かつ実行された時期となっている。

6. ヘレニズム的軸線計画の背景

以上のように、神域の建物の軸線的な配置計画は、紀元前2世紀になってそのもっとも完成した形に到達した。建築の単体においては、紀元前5世紀にパルテノンが造られギリシア建築の頂点に達したことを考えると、その後からギリシア建築は、建物相互間に明確な論理を求めるといふ新しい方向を目指して出発しようとしていたことを物語っているように思われる。その新しい方向

図-6 アテネのアゴラ（A：アッタロスのストア，B：演説台，C：メトロオン，D：ヘファイステイオン）

図-7 セリヌスのデメテール神域

図-8 ミレトスのブウレウテリオン

がはっきりと意識され始めたのは、神域の配置にかぎり、セリヌスのデメテール神域や、コリントのアスクレピオス神域に見られるように、おそらく紀元前5世紀から4世紀にかけてであったようだ。

なぜこのような新しい理念が、神域の配置計画に出現したかという問題に回答を出すことは容易ではない。紀元前4世紀頃から新しい時代の考え方が起こったことは当然であるが、それが神域の計画に具体的にどのように影響を及ぼしたかを実証することは、おそらく不可能に近い。したがって、ここでは神域の軸線計画の発展を促したであろう背景を、簡単に整理して述べることに止めたい¹⁸⁾。

その主な背景のひとつは、ヘレニズム期には空間と時間に関する認識が深くなったことであろう。古代科学はこの時期に急速な発展をとげ、ユークリッド（前300年頃）はアレクサンドリアで「幾何学」を書き、空間とそれを限定する図形の学問体系を確立した。

またやや遅れてエラトステネス（前275-194年頃）は太陽高度を計測して地球の大きさを計算しており、こうした科学の発達で、それまで漠然と捉えられていた空間に秩序が与えられかつ組織化されるようになったのである。実際、エラトステネスは、地球を経度と緯度という二次元の座標空間として把握している。こうした空間の捉え方は、例えばヒッポダモス式の格子状道路で都市が計画されているプリエネやマグネシアなどでは、道路網が地球の方位に正確に合わせて配置されていることから説明される。

また例えばアテネには、やはり東西南北の地球の方位に正確に合わせられた八角形の気象台兼天文台ともいふべき「風の塔（紀元前1世紀後半）」が建設され、ここでは風向の計測さえ行なわれ、当然ながら日時計および水時計による時間の計測も行なわれた。

蛇足ながらオニアンスによれば、そもそも空間という言葉（Space）は、スタディオン（Stadion）と呼ばれたギリシアの競争場の名称に語源をもつ¹⁹⁾。1スタディオンは元来600ftに相当する長さの単位のこと、この競争のための長さの単位がそのまま建物の名称となった。したがって空間という言葉自体が、単に何もない場所といった無限定のものでなく、限定されたもの即ち意図をもって計測されたもの、という意味を内在しているのである。

都市や神域のような、壁で囲まれて明確に限定された空間に道路や建物の配置によって一つの軸を与えるということは、おそらく、世界は一つの秩序に基づいた完結したもの、つまりコスモスだとする考えを現実に視覚化する試みであったと思われる。したがって神域に中心軸線を設定するということは、こうした世界に秩序を与える基準線を設定することにほかならない。とくに、プロピロンから神殿にいたる人間の動線が、この軸線にほとんどの場合重なるので、見学者はこの世界の基準線を強く意識したであろう。

軸線による神域の配置計画は、最終的な形として中心

軸に沿った動線上に、階段が付加されることによって劇的な効果を生み出した。また中心軸上にくる建物の両側に列柱の翼廊がつくことで、最大限に強調されることとなった。リンドスのアテナ神域、コスのアスクレピオス神域の上テラス、そしてペルガモンのゼウスの大祭壇正面はこの好例である。こうした劇的な空間演出は、高いポディウムに載せられた神殿、それを四方で取り囲む柱廊、幅の広い大階段を前面にもつ正面の柱廊などで構成された、パールバックのようなローマ期の神域にそのまま受け継がれた。

7. 結語：ギリシア神域における軸線性の発展

紀元前6世紀以前の神域については、プロピロンの軸線と神殿の軸線を一致させる傾向を認められるような神域はない²⁰⁾。これらの神域では、全体の形状さえ整形のものではなく、それがやと整形化されたり、建物の直角配置ないし平行配置がなされるようになるのは、三段階の発展が見られるアイギナのアファイア神域の最終段階の神殿（紀元前500年頃）²¹⁾と、スウニオンのポセイドン神殿（紀元前500年頃）²²⁾あたりからである。

神域の配置において、不完全ながらも軸線性が意識し始められるのは、紀元前5世紀ころと見てよさそうである。その最初の例がセリヌスのデメテル神域であり、既存の神殿及び祭壇に対して、斜めになっているが、ともかく軸線性、正面性をかなり意識してプロピロンが配置されているといつてよい。この紀元前5世紀という時期は、プロピロンの位置だけでなく、アテネのアクロポリスのプロピライア（紀元前437-432年）、同じくアルテミス・ブラウロニアの神域（紀元前5世紀）などに見られるように²³⁾、建物の正面左右に両翼を付加し、単体の建物としても軸線性、正面性を意識しはじめた時期でもある。神殿への人間の動線を問題にせず、神域全体の形と神殿の位置だけに注目すれば、スパルタのメネライオン（前5世紀）のように²⁴⁾、矩形の神域の中心に神殿を配置するという軸線的な配置計画も、すでにこの時代に行なわれているのである。またコリントにある紀元前4世紀のアスクレピオスの神域も、プロピロンの軸線は神殿の軸線と平行で、互いにずらされているだけで、正面性の強調された計画となっている。

ヘレニズム期の神域でも、完全に中心軸線が通り左右対称の計画がなされたのは、前述したように最終的に紀元前2世紀になってからである。その例としてメッセネのアスクレピオス神域²⁵⁾、最終段階におけるドドナのゼウス神域²⁶⁾などがあげられる。とくにドドナの場合、この過渡期の神域の発展が非常に明確に現れており興味深い。したがって軸線の意識が萌芽した紀元前5世紀から、それに基づく完全な左右対称の配置計画が成就された紀元前2世紀までの300年間がその移行期間であった。そ

の間、上で述べたようなプロピロンの軸線と外壁の線を重ね合わせたり、隅角部を重ね合わせたりする軸線のずらし、そして軸線を特殊な点で曲げるという様々な試行錯誤が行なわれたと言える。

本稿では、発掘報告書の図面をもとにして、建物の相互関係を軸線という観点から分析した。本来はこれに建物相互間の距離を調べ、定量的分析をすれば、もっと厳密な配置における比例関係なども含め、神域全体の設計手順が解明できるだろうが、オリンピアは別として、報告書にはそうしたことを可能にする詳しい実測値や縮尺の大きい平面図がほとんどなく、そのため本稿では定性的な分析に止めた。

注

- 1) Ito, J. "Three Sanctuaries in Priene and Magnesia on the Maeander: A Study of Hellenistic Site Planning" Transactions of AIJ, no. 339, pp. 145~153, 1984; _____. "The Site Planning of Two Sanctuaries in the Island of Kos" *ibid.*, no. 363, pp. 146~157, 1986; _____. "The Planning of Jupiter Sanctuaries at Baalbek: A Study of Roman Site Planning" *ibid.*, no. 377, pp. 106~118, 1987; _____. "The Planning of Two Peristylar Buildings in Olympia and Epidauros: A Study of Architectural Planning in Ancient Greece" *ibid.*, no. 425, pp. 113~122, 1991.
- 2) 注1) のとくに1984年の稿参照。
- 3) Stillwell, R. "The Siting of Classical Greek Temples" Journal of Society of Architectural Historians 13, no. 4, pp. 3~8, 1954.
- 4) Wycherley, R. E. "How the Greeks Built Cities" London, pp. 97~100, 1967.
- 5) Curtius, E. & Adler, F. "Olympia: Die Ergebnisse der von dem Deutschen Reich verstedten Ausgrabung, Karten und Plane" Amsterdam, 1966, rep. Plate VI a-f. この報告書は、オリンピアに関する公刊された発掘報告としては最も詳細なもので、オリンピア研究の基本文献である。本文と図版があり、図版だけで全5巻から成り、うち2巻が建築、2巻が彫刻等の出土品、1巻が地図・配置図であり、発掘された建築及び出土品の現況図、復元図、写真などA2版の図約300枚が収められている。本稿の分析用資料として、地図・配置図篇の中の6枚組の図面(縮尺1/320)を用いた。
- 6) Malwitz, A. "Olympia und seine Bauten" München, 1971. 巻末の平面図。建物が時代別に色分けしてあり、また何年頃建設され何年頃まで使用されたかがすぐ分かる年表が付いている。
- 7) Herzog, R. and Schatzmann, P. "Kos: Ergebnisse der Deutschen Ausgrabungen und Forschungen, I: Asklepieion" Berlin, Plate 37, 38, 1932. 図版37は縮尺約1/1100、及び図版38は縮尺約1/750であり、基本的には図版38を分析に用いた。但し現場確認の結果、図版38で下ストアの東翼廊と主廊とのなす角度が丁度90度として描かれている点は誤りであることが判明し、そ

の点を図版37で補った。

- 8) Hulot, J. and Fougères, G. "Selinonte: la ville, l'acropole et les temples" Paris, pp. 263~271, 1910.
- 9) Schrammen, J. "Der Grosse Altar: Der Obere Markt" Die Altertümer von Pergamon, vol. 3, part 1. Berlin, pl. 1, 1906.
- 10) Humann, C. "Magnesia am Maeander" Berlin, 1904, Blatt 2 参照。また注1)の拙著1984年の稿参照されたい。
- 11) どちらを基準にしたかということは、実のところはつきりしない。当然神殿の左隅と祭壇の中央を結ぶ線の延長線上に、プロピロンを配置したとも考えられる。
- 12) Bohn, R. "Das Heiligtum der Athena Polias" Altertümer von Pergamon vol. 2, Berlin, Pl. 40, 1885. 参照。
- 13) Wiegand, Th. and Schrader, H. "Priene" Berlin, pp. 136~147, pl. 13, 1904.
- 14) *op. cit.*, pp. 81~135, pl. 9. または注1)の拙著1984年の稿参照されたい。
- 15) Bohtz, C. H. "Das Demeter-Heiligtum" Altertümer von Pergamon vol. 13, Berlin, 1981.
- 16) Roebuck, C. "The Asklepieion and Lerna" Corinth vol. 14, American School of Classical Studies at Athens, pp. 23~110, Plan A-E, 1951. 参照。
- 17) Onians, J. "Art and Thought in the Hellenistic Age" London, p. 173, fig. 181, 1979.
- 18) 精しくはオニアンスの前掲書(注17)を参照されたい。
- 19) Onians, *op. cit.*, p. 168.
- 20) アルカイック期の神域の配置に関しては、ベルギストの詳細な研究を参照。Bergquist, B. "The Archaic Greek Temenos" Lund, 1967.
- 21) Welter, G. "Aegina" Athens, fig. 2~4, 1962. 参照。
- 22) Stais, V. "To Sounion kai Naoi Poseidonos kai Athenas" Athens, 1927. 巻末の配置図参照。
- 23) Stevens, G. P. "The Periclean Entrance Court of the Acropolis at Athens" Hesperia 5, 1936, pp. 459~470; Travlos, J. "Pictorial Dictionary of Ancient Athens" London, fig. 169, 1971. 参照。
- 24) Wace, A. J. B. & Thompson, M. S. "Excavation at Sparta, 1909; The Menelaion" BSA 15, pp. 108~116, pl. 5, 1908. 参照。
- 25) Orlandos, A. K. "H Anaskaphe tes Messenes" Ergon, pp. 79~82, fig. 61, 1973. 参照。
- 26) Evangelidis, D. & Dakaris, S. "To Ieron tes Dodones: Iera Oikia" Archaiologikes Ephemeris, pp. 1~193, fig. 6~9, 1959. 参照。

図版出典

- 図—1 注6)の平面図をもとに著者作製。
 図—2 注7)の, Tafel 37をもとに著者作製。
 図—3, 4, 5 著者作製。
 図—6 注17)のオニアンスの挿図を転載。
 図—7 注8), p. 265の平面図をもとに著者作製。
 図—8 Kleiner, G. "Die Ruinen von Milet" Berlin, 1968, Abb. 52.

(1991年8月21日原稿受理, 1992年2月12日採用決定)